

13. 口腔上皮性病変における免疫組織学的検索

武田 秋生, 林 康弘, 工藤 逸郎
(日大・歯・口外1)
茂呂 周 (同・歯・病理)

口腔における前癌病変として上皮性異形成の存在があげられている。発癌過程において癌遺伝子の活性化、癌抑制遺伝子の不活性化は重要な役割を果たしている。今回、我々は癌抑制遺伝子産物である p53 蛋白の発現について、口腔の上皮性異形成、上皮内癌および扁平上皮癌の生検材料を用い免疫組織学的に検索し、その結果より p53 の発現は癌化過程の早期から関連していることが示唆された。

14. CDDP・5-FU 併用動注化学療法の経験

吉村 誠, 林 康弘, 川島 輝昭
竹浪 穰二, 西村 敏, 三宅 正彦
工藤 逸郎 (日大・歯・口外1)

患者は75歳、女性。左側上顎臼歯部歯肉の腫脹と疼痛を主訴として当科を紹介され、来院した。左側上顎4～7にかけて、40×34mm大の潰瘍を認めたが、上顎洞には異常を認めなかった。左側上顎歯肉癌、T3N0MXの臨床診断の下に生検を行い、中分化型扁平上皮癌の病理組織診断を得た。この症例に対し、術前化学療法としてCDDP・5-FUを併用する浅側頭動脈からの動注化学療法を施行したのでその概要を報告した。

15. 耳下腺部に生じた悪性リンパ腫の1例

北 麻由美, 三橋 建夫, 鈴木 邦子
片岡 芳保, 田中 孝佳, 石井 輝彦
岩成 進吉, 工藤 逸郎
(日大・歯・口外1)

症例：初診3カ月前より、右側耳前部に腫瘤を自覚するが放置。その後増大傾向を示し前医より当科を紹介され来院した。初診時右側耳前部に小児手拳大の腫瘤を触知した。また右側の眼瞼下垂および眼瞼浮腫が認められ、前額部の皺と鼻唇溝の減弱が認められた。右側耳下腺悪性腫瘍の臨床診断のもと、全麻下にて腫瘍摘出術を施行後、血液内科に依頼しMACOP-B療法を2クール施行し、現在経過観察中である。

16. 下顎欠損部腸骨移植の予後の検討

宮内 健進, 三枝 弘樹, 鈴木 潤子
馬橋 敏紀, 高原 正明, 宮 恒男
(千大)

過去8年間の下顎欠損部腸骨移植症例20例を対象に

移植骨の予後をX線、臨床所見より判定基準を設け分類し、術後感染例(A2～D2)8例を中心に完全生着例(A1)12例と比較検討した。その結果、悪性腫瘍の下顎欠損部に対する骨移植生着率を向上させる方法として、高齢者の骨移植は要注意。術前照射の線量、照射野を縮小。移植床の十分な組織量。死腔を残さない。二次的に骨移植を行う。miniplateの固定は避ける。血管付き骨移植を利用する。

17. 出血性素因患児の口腔内出血時に使用した止血スプリントの有用性

甲原 玄秋 (千葉県こども病院)

出血性素因を有する患児25例に止血スプリントを使用しその効果について検討した。1) 血小板数が $1 \times 10^4 / \mu l$ 以下の特発性血小板減少性紫斑病、白血病の歯肉出血例でスプリントは有効であった。2) 重度血友病Aの抜歯においては因子補充も必要であった。3) 抗凝固剤連用のまま抜歯したが止血可能であった。止血スプリントは種々の口腔出血に対し有用で、欠乏因子補充の削減、抗凝固剤連用下での抜歯が期待できる。

18. 下顎角部骨折に microplate による口内からの固定法の1例

臼渕 公敏, 佐藤 栄需, 長谷川 博
川崎 建治 (福島医大)

近年注目されているマイクロプレートによる顎骨の固定法は顎間固定期間や入院期間の短縮、術後の後戻りの減少を目的に現在広く用いられている。今回、われわれは両側下顎角部骨折の患者に対して、皮膚切開を加えることなく口腔内アプローチにより、プレート固定を施行したのでその症例と術式について報告した。本法は外切開を置かずに、顎間固定期間を短縮できる可能性があり、有用な方法と考えられた。

19. 君津中央病院歯科口腔外科における過去7年間の交通顎顔面外傷の臨床統計：安全装置の着用状況と受傷内容について

古谷 隆則, 宮 恒男, 加藤 治郎
青木 洋大 (千大)
金澤 春幸 (君津中央病院・歯口外)

交通事故による顎顔面骨折41症例(自動車事故28例、自動二輪事故13例)について検討した。事故発生時のシートベルトの装着率は19.0%、ヘルメット着用率は88.9%であった。合併損傷発生率は、シートベルト装着者50%に対し、未装着者76%、ヘルメット着用者88%であった。シートベルトは体幹部損傷の防止に、またヘルメットは頭部外傷の防止に有用であったが、